

11月23日 逍遙 

## 「第三の記憶とは」、「ウイズ」のころ

「海の記憶」の一つ目、それは、対明貿易の利益に着目した島津氏による「琉球侵攻」。琉球王国は、独立の体裁を保ちつつも、実質、薩摩藩の支配下に置かれ、現在の長田中付近には王国の出先機関「琉球館」があったそう。現在よりはるか手前まであった鹿児島湾の沖に浮かぶ琉球船、珍しい衣装や言葉。当時の異国情緒が想像できます。琉球を通じ薩摩藩が手に入れた財政力や海外情報などが明治維新への原動力になったと、こちらではよく言われますが、南の海の向こう側からすれば、当然違った物言いになるでしょうね。

「海の記憶」のもう一つは「薩英戦争」。生麦事件に端を発して鹿児島湾に来航した7隻の英国艦隊と、それを沿岸の台場から砲撃した薩摩藩。こちらの方はお互いの力を認識し合う結果となり、その後はむしろ接近して、幕末維新期における政局の展開に重大な影響を及ぼすこととなったのだそうです。陸の記憶」でもなく「海の記憶」でもない、「ウイズ コロナ」の新時代が人間達に容赦なく刻み込むであろう「第三の記憶」とは、果たして？

次回「すず と 逍遙館長 それぞれの帰り道、のころ」

